

入 力 仮 説 批 判

兵庫教育大学 山 岡 俊 比 古

1. 入力仮説

Krashen のモニター理論を構成する仮説の中で最も重要なものである入力仮説 (the Input Hypothesis) は、第2言語の習得方法に関わるもので、「我々は我々の現時点における (獲得された) 能力をわずかに越える入力を理解することによって、言語を獲得する (学習するのではない)」と主張する (Krashen and Terrell 1983:32)。さらに、Krashen (1985:2) はこれが言語習得の唯一の方法であるとも述べる。この仮説の付随的命題として、話す能力は理解可能な入力を通して培われる能力の結果として、自ずと現れてくるということと (これは、理解が表出に先行すると表現されることもある)、もし入力が理解可能なものであれば、習得者にとって必要な文法はそこに自動的に含まれているとする、2つがあげられる (Krashen 1985:2)。

Krashen (1982:22-30) は、この仮説を支持する証拠として次の5つをあげる。

- (1) 第1言語を習得する子供が受け取る言語入力は、言語を教授する意図的な試みがなされないこと、子供の能力レベルに大まかに合わされている (roughly-tuned) こと、現在地性・現時点性 (here-and-nowness) の原則に基づいていることからして、入力仮説で言う入力と通じている。
- (2) 第2言語習得においても、学習者が受ける入力は単純化されている (e.g. foreigner-talk, teacher-talk, interlanguage-talk)。
- (3) 第2言語習得の開始時に、表出をはとんど行わず聞くことだけに専念する、いわゆる沈黙期 (silent period) が観察される。
- (4) 表出において必要な第2言語の知識がまだ無いときには、母語の規則を代用することになるが、これは益よりも害が多い。
- (5) 習得の開始時に話すことを課さない教授方法の成功例として、全身反応教授法 (the Total Physical Response Method) (Asher 1966, 1969)、自然的アプローチ (the Natural Approach) (Terrell 1977)、理解優先アプローチ (the Comprehension Approach) (Gary 1975; Postovsky 1974) がある。

以上のような特徴と証拠づけを持つ入力仮説に対して、以下において、この仮説の原理そのものに関わる視点と、この仮説を支えるものとして位置づけられている現象的事実および教授実践結果の解釈の仕方に関わる視点と、仮定的にこの仮説を受け入れたとして、その実践で予想される問題点という、3つの視点から批判を加える。

2. 原理的批判

入力仮説に対してすでに批判が向けられている。これは相互作用仮説 (the Interaction Hypothesis) と呼ばれ、言語習得が行われるためには、聞くことと話すことの相互的な影響が必要であるとするものである。この仮説の強い立場は、相互作用が無ければ習得は全く有り得ないと仮定する。弱い立場では、相互作用によって増える入力の分だけ習得が進むとされる。弱い立場は入力仮説と矛盾しない。強い立場に対して、Krashen (1985:34) は沈黙期の現象と、先

にあげた教授実践の成功例を説明できないとして反論する。なお、第2言語能力は、コミュニケーション場面の中における表出の練習を通して発達するという考え方があるが、これは相互作用仮説の強い立場の1つであり、表出仮説 (an Output Hypothesis) と呼ばれる。これに対して Krashen (1985:35-36) は、文法的正確さはコミュニケーションが成立するための指針たりえないこと、口頭での表出を全く伴わないタイプの言語習得があること、文法のあらゆる部門のあらゆる項目を表出して試すということは有りえないことをあげて反論する。

ここで私は、もう1つ別の意味の表出仮説を提示したい。つまり、通常の場合のように、言語が口頭表出という側面を伴って発達するためには、表出はあらゆる発達の時点において必然的かつ必要な過程であるとするものである。その根拠として、以下に2つの事実をあげる。

まず第1に、言語習得において、厳密な意味での何らかの理解が表出に先行することは事実であろうが、入力仮説が想定するような、能力としての定着を待って表出が行われるのではなく、規則としてはまだ不完全で不安定な段階から、それを使った表出が行われているのであり、その過程を重ねていく中で能力として定着していくという事実が、第1言語習得過程の初期段階に観察される。つまり、1語発話や2語発話のような初期の発話は、文法的な知識の反映としてではなくて、子供が環境の中に見出す意味関係 (例えば、行為者と行為) を具現するものとして見るべきである。これは、子供が言語的な理解をまだ行っていない段階から表出が行われていることを示すものである。さらに、子供は、例えば、行為者と行為という意味関係を1つの抽象的な概念としてまず把握し、それを2語発話の形で表出しているのではなくて、行為者と行為の関係が成立している個々の事例に触れ、それぞれの中に個別の関係として行為者と行為の関係を見だし、それを個別的に2語発話に供しているのである。個別的関係としてのこのような関係が、たくさんの事例を通す中で受容的にも表出的にも経験され、子供の中に集積されると、この個別性に支えられた関係が、その個別性を脱却し、1つの抽象的な範疇としての機能を持つようになる。言語習得の初期段階において、その発達の仕方は、意味関係から文法関係へ、規則の個別性から範疇化へと進むのであり (Schlesinger 1982), この間において表出は絶えず行われているのである。

第2に、理解のメカニズムと表出のメカニズムという観点からすれば、それぞれの過程における言語的な冗長性の扱いや、意味と言語符号との関係の仕方などが異なっており、2つのメカニズムはそれぞれが独自の面を持っていると考えなくてはならないから、表出が「自ずと」理解から出てくるとは到底考えにくい。かなりの理解能力は持っているのに、表出が限定されているという事例はたくさんある。

3. 解釈論的批判

Krashen (1982:27) は、沈黙期を、聞くことを通して第2言語の能力を培っている時期と解釈する。大切な点は、来るべき表出を生むのに十分な能力を、聞くことのみによって身につけるとすることである。Krashenはこの現象の事例として、Hakuta (1974) を引合いに出す。しかし、Hakuta (1986:107) によれば、Uguisu が沈黙していたのは、表出に必要な自信が無かったからである。つまり、この現象は言語発達の原理的現象というよりも、心理的な現象として見るべきものとなる。

同様に、Gibbons (1985) の行った集団調査では、沈黙期はその間において理解が行われている時期ではなく (silent comprehension), 理解ができないから沈黙を強いられている時期である (silent incomprehension), という結果が得られた。ひとたび理解がなされれば、それは早々

に何らかの形で表出されたことも確認された。沈黙の期間が長引く場合は心理的な問題が絡んでいる場合であり、この期間の個人差が激しいことも、このことを示すものである。さらに、入力仮説に従って沈黙期を厳密に考えると、個々のあらゆる規則に沈黙期を想定しなければならず、表出も個々の規則ごとに行われるはずである。しかし、沈黙期の終了時点では、一挙に多くの規則に基づいた発話が出される。この事実も言語的に説明するより、心理的に説明しやすいものである。以上の考察からすれば、Krashen の沈黙期の解釈は間違っていることになる。

次に、Krashen が支持的なものとしてあげる教授実践結果についての解釈を取り扱う。Asher の一連の実験報告を見ると、主張される優越した結果をもたらすものは何かという点で、きわめて曖昧である。特に、Asher (1966) の実験では、授業において身体反応をする者と観察のみを行う者を、同じ身体反応で答えるテストで調べると、同等の結果が出るということから、決定因子になっているのは、授業における身体反応ではなく、テスト時における身体反応であると結論せざるをえなくなっている。さらに、彼はこの決定因子のより厳密な特定化にも失敗している (Asher 1969)。これらのことは、全身反応教授法の根幹に対して深刻な疑念を差し挟むものと言わねばならない。また、授業時の身体反応に口頭表出を課す場合と課さない場合の比較を行い、後者の優越性を唱えているが、その表出はモデルをただ模倣するだけといった、かなり扱いの乱暴なものであることに注意しなければならない。最後に、この教授法によって学習者がいよいよ表出を始めるとき、それはきわめて不完全なものではないという事実も、指摘しておく価値がある (Hammerly 1985:23)。

Terrell (1977) の自然的教授法は、教室での活動は意味に注意を向けたコミュニケーションにすべて当て、誤りは訂正せず、学生は母語や第 2 言語を自由に使って反応してよいとする特徴を持っている。しかし、同時に見落としてならないことは、学生の表出に正確さを期するのであれば、言語形式の説明と練習は不可欠であるとしている点である。そして、この形式の学習は、教室外で学生自らの責任においてなすべきものとされている。加えて、この学習は注意深く計画され、高度に構造化されたものでなければならないとも付言している。つまり、Terrell (1982) は、獲得 (acquisition) と学習 (learning) は言語運用能力の発達に共に大切であると認めている。従って、Krashen による Terrell の扱いは、教室外で行われる活動を無視したものと言わねばならない。

Krashen の思い入れにも関わらず、Gary (1975) の実験結果は、初期段階において話すことを課されなかった学生は、少なくとも話すことを課された学生と同等であったとするもので、Gary 自身、この問題に関しては、さらに研究する必要性があると指摘しているのである。また、Postovsky の実験 (1974) についても、Krashen が触れようとしない事実がある。つまり、この実験で学生は、口頭の模倣練習に代わる書取練習、口頭の文型練習に代わる筆記練習、対話の暗唱に代わる筆記を課されているのであり、口頭によるものではないにしろ、表出活動を行って記憶の定着を計っているのである。

ここで取り上げた 4 つの教授実践報告は、いずれも Krashen 自身が自らの仮説を補強するために引いているものであるにも関わらず、逐一確認したように、それぞれが重大な疑義を抱えているのである。Krashen の擁護者は、その仮説は注意深く実験データに基づいているとし、Krashen に批判的な人は、十分な証拠に基づいていないことを指摘するが、このように見てくれば、この一見矛盾した主張がなされるのも理解できることである。

解釈論的批判の第 3 として、内的表出の可能性とその役割について述べる。Postovsky (1976) 自身、彼の実験結果をもたらした要因の 1 つは、学生の内部で行われる復唱 (mental rehearsal) であることを、学生からの報告に基づいて示唆している。さらに、Krashen (1983) も、自らの

ロシア語の学習体験から、ロシア語の語、音、音調、語句などが、それを表出した人の声のまま自分の頭の中で反響し、無意識のうちにそれを、いわば、反芻していることに気がついたと報告している。彼はこれを鳴響仮説 (the Din Hypothesis) と名付け、このような復唱が素早い口頭表出を可能にするのであるとしている。

入力仮説では口頭表出の必要性を認めないが、鳴響仮説では内的な表出を認め、その役割を重く見る。これは1つの矛盾としなければならない。口頭表出をあえて避ける理由が、運動技能的なものであったり、恥しさのような心理的なものであるとすると、入力仮説はその言語発達に関する原理的な説明力を失ってしまうことになる。つまり、内的に表出されているものを外的に表出してはいけないとする、言語発達上の原理的理由は無いのである。

4. 実践論的批判

ここでは、仮に入力仮説を認め、それを実践するとした場合に考えられる問題点を扱う。まず時間の問題を取り上げる。入力仮説は、つまるところ、第2言語の教室をできる限り自然な言語習得の状況へ近付けることを主張しているとしてよい。自然な母語習得において子供が2才から6才までに利用できる時間は、ある計算によると、およそ18,000時間である (Hammerly 1982:95)。これに対し、入力仮説の立場からみれば、理想的な第2言語習得の状況といえる早期全体浸漬教授課程 (the early total immersion programme) でも、生徒が第2言語に触れる時間数は数千時間である。浸漬的アプローチは、第2言語教授の数少ない成功例として賞賛されることが多いが、最近では、その効果として、理解という面の優越さは認めるにしても、表出の面はそれほどでもないことが認識され始めており、このアプローチには、この面の発達を迫る強い社会的な刺激にも欠けていることが指摘されている (McLaughlin 1985:71; Hammerly 1985:29-44)。通常の第2言語教授課程の年間時間数を、200時間程度であるとすると、これは、母語習得の子供の利用時間数は言うに及ばず、浸漬教授課程の生徒の時間数にも、はるかに及ばない。従って、通常の第2言語教授課程で入力仮説に基づいた活動をやったとしても、その結果は、浸漬的アプローチの生徒の到達するレベルからみればはるかに劣ることが容易に予想される。FSIは、伝統的な教授法の下で第2言語の2+のレベルを達成するのに必要な時間数を、近親言語にあっては720時間、かけ離れた言語にあっては1950時間と見積っているが、Krashenはこの数字をとらえ、伝統的な方法でそれだけ掛かるのであれば、入力仮説に基づいた方法によればもっと能率的に行うことが可能であると述べている (Krashen 1982:72)。多くの事実からすれば、Krashenのこのことは信じがたい。

次に、発達過程に関する問題をあげる。入力仮説に従えば、第2言語の文法体系は、その言語を自然に習得する子供の習得過程と同じ発達過程を示すことになる。しかも、その教授上の指針に従って誤りを訂正しないとすると、例えば、表1に示すような遷移的な発達段階を認め、その成長を忍耐強く持たなければならないことになる。しかし、これは時間的観点からも許容しがたいものであろうし、極めて非現実的なことでもある。

1. *no + S or S + no (Wear mitten no)*
2. *NP + neg + VP (He no bite you)*
3. *NP + Aux + neg + VP (You don't want some supper)*

表1 英語の否定の自然な発達段階

また、沈黙期の入力仮説的な説明を受け入れ、それを教授に取り込むとすると、学習者においては、この期間に内的な表出が行われていると考えなければならないが、それが歪んだり間違った形で行われている場合、外部からのチェックを受ける機会が無いので、実際に表出されたときには、すでにそれが固定化してしまったり、訂正が効かないほどたくさんの誤りが出てくることになる。

5. まとめ

Krashen の入力仮説は言語発達上の原理にそぐわないものであり、その仮説を支持する証拠の解釈にも深刻な疑義があり、現実の実践という面からしても極めて困難なものであると結論しなければならない。

Widdowson(1984:324-329) は、Krashen の理論およびそれに基づいた自然主義的な教授法の推賞に対して批判を加え、この理論が概念的にばかげており、経験的事実によっておらず、その教授実践は人を誤らせる危険なものであるという主旨のことを述べている。本論における議論は、まさにこの Widdowson のことばを裏付けるものになっている。

参考文献

- Asher, J. J. (1966) 'The Learning Strategy of the Total Physical Response: A Review.' *Modern Language Journal* 50: 79-84.
- Asher, J. J. (1969) 'The Total Physical Response Approach to Second Language Learning.' *Modern Language Journal* 53: 3-17.
- Gary, J. O. (1975) 'Delayed Oral Practice in Initial Second Language Learning' in M. Burt and H. Dulay (eds.) (1975) *New Directions in Second Language Teaching, Learning and Bilingual Education*. Washington, D. C.: TESOL. 89-95.
- Gibbon, J. (1985) 'The Silent Period: An Examination.' *Language Learning* 35: 255-267.
- Hakuta, K. (1974) 'Prefabricated Patterns and the Emergence of Structure in Second Language Acquisition.' *Language Learning* 24: 287-297.
- Hakuta, K. (1986) *Mirror of Language: The Debate on Bilingualism*. New York: Basic Books, Inc., Publishers.
- Hammerly, H. (1982) *Synthesis in Second Language Teaching: An Introduction to Linguistics*. Blaine, Wash.: Second Language Publications.
- Hammerly, H. (1985) *An Integrated Theory of Language Teaching and Its Practical Consequences*. Blaine, Wash.: Second Language Publications.
- Krashen, S. D. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon Press.
- Krashen, S. D. (1983) 'The Din in the Head, Input, and the Language Acquisition Device.' *Foreign Language Annals* 16: 41-44.
- Krashen, S. D. (1985) *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman Group Limited.
- Krashen, S. D. and T. D. Terrell (1983) *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford and San Francisco: Pergamon Press and Alemany Press.

- McLaughlin, B. (1985) *Second Language Acquisition in Childhood : Volume 2. School-Age Children*. Second Edition. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Postovsky, V. A. (1974) 'Effects of Delay in Oral Production at the Beginning of Second Language Learning.' *Modern Language Journal* 58 : 229—239.
- Postovsky, V. A. (1976) 'The Priority of Aural Comprehension in the Language Acquisition Process' in H. Winitz (ed.) (1981) *The Comprehension Approach to Foreign Language Instruction*. Rowley, Mass. : Newbury House Publishers. 170—186.
- Schlesinger, I. M. (1982) *Steps to Language: Toward a Theory of Native Language Acquisition*. Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Terrell, T.D. (1977) 'A Natural Approach to Second Language Acquisition and Learning.' *Modern Language Journal* 61 : 325—337.
- Terrell, T.D. (1982) 'The Natural Approach to Language Teaching : An Update.' *Modern Language Journal* 66:121—132.
- Widdowson, H.G. (1984) 'Discussant.' in A. Davies, C. Crier, and A. P. R. Howatt (eds.) (1984) *Interlanguage*. Edinburgh : Edinburgh University Press. 324—329.